蹂躙される沖縄の環境と民意

――日本にとって沖縄とは何か――

桜　井　国　俊

はじめに

『環境と公害』第47巻第2号に論文「沖縄の環境・平和・自治・人権――第33回日本環境会議沖縄大会以降の沖縄の状況」を掲載してから1年が経過した．この間，沖縄では，基地がもたらす環境問題の深刻さがますます明らかになってきたが，大手メディアの無関心もあり，身近に米軍基地を抱えていない本土の人々にはその問題性が必ずしも的確には伝わっていない．

そこでこの特集では，辺野古新基地建設問題を中心に，その後の沖縄での基地環境問題の展開について報告する．まず問題の背景と辺野古問題の概要の説明を筆者が行い，次いで環境の観点から重要なジュゴンとサンゴの問題について3名の方々に報告して頂く．再開された米国ジュゴン訴訟における原告・被告双方の主張と本年8月1日に出された判決について吉川秀樹氏に，沖縄／辺野古のジュゴンについて細川太郎氏に，そして辺野古新基地建設に当たり環境保全措置として行われることになっているサンゴの移植の問題性について安部真理子氏に報告して頂く．

繰り返し表明されている沖縄の人々の反対の声を無視して強行される辺野古新基地建設は，沖縄の環境のみならず平和・自治・人権をも踏みにじるものであるが，その黙認は日本社会全体を蝕むものとなる．この特集が日本が直面する環境・平和・自治・人権問題について理解する一助となることを願っている．

なおこの小論は，事態が急速に動く中で，2018年8月10日の時点で執筆したものであることをお断りしておく．

1．沖縄を巡る平和の状況

(1)　東アジア情勢の大変動

まずは沖縄を巡る平和の状況について見ておく．沖縄には中国・北朝鮮と対峙する米軍基地が集中配備され，東アジア情勢の動向がその環境・平和・自治・人権のあり様に大きく影響する．小さな島で米軍基地と隣り合わせで暮らす沖縄の人々は，何かにつけて戦争の恐怖を実感するが，昨年後半は北朝鮮のミサイル発射実験・核実験でその恐怖がとりわけ高まった[1)]．

沖縄戦の体験から，沖縄の人々は「軍隊がいるから，基地があるから攻撃される」と確信している．辺野古の新基地建設と高江のオスプレイパッド建設に反対するのは，この確信に基づき，二度と沖縄戦の悲劇を繰り返さず，また朝鮮戦争・ベトナム戦争時のように二度と加害の側に加担しないと誓っているからである．

しかし沖縄から眺めると，安倍政権は，体制存続を図って北朝鮮が軍事戦略をエスカレートさせればさせるほど米国トランプ政権が示す強い反応に同調し，日本全体の世論もそれを支持して軍事対決路線にひた走ってきたように見える．「共謀罪」法の強行可決にまで至る「戦争の出来る普通の国」造りのための一連の法整備は，まさにこのような国際環境を背景に進められてきた．与那国島，石垣島，宮古島に始まる南西諸島の軍事要塞化も嫌中国感情や嫌北朝鮮感情の高まりを背景に強行されている．こうした危機が更にエスカレートしてレッドラインを越えた時，待ち受けているのはミサイルが飛び交う環日本海戦争であり，沖縄は再び本土のための捨て石となる．